

主 題：霊的成熟を目指して走る

聖書箇所：ピリピ人への手紙 3章12-14節

近藤牧師からスティーブ・ウイラー師の紹介

現在、世界14ヶ国で働く宣教師たちを支援するホワイト・フィールドという宣教団体の責任者です。こちらに来られる前の1週間はフィリピンで働きをされましたが、その際、支援する60名の牧師たちが集まって研修のときをもたれ、感謝なことにその帰りにこちらに寄ってくださいました。ウイラー先生は私の神学校時代の友達で、同じ年に卒業しています。当時、彼はグレイス・コミュニティ教会の書店のマネージャーをしておられ、本屋でよく顔を合わせ、そして、いっしょに授業を受けました。今から16年前のことです。そのようなわけで、私の親しい友人がここに来てみことばを取り次いでくれるということは非常に感謝なことです。皆さんも期待しながら心を開いて主のみことばを聞いていただきたいと思います。

スティーブ・ウイラー師

こうして皆さんと今朝ともにできることは私にとって特権であり、ともにみことばを見ることができるとは何よりも素晴らしいことです。皆さんの先生と友情を交わすことができることは私の特権で、多くのクラスとともに学びました。彼のみことばを解き明かすという決意と、教会を正しく導いて行こうとする献身さは私にとっても大きな励みです。今日、皆さんとこうしてみことばを開いて分かち合うことができることを感謝しています。ピリピ3：12-14をごいっしょに見て行きましょう。

☆霊的成熟を目指して

ピリピ3：12-14「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。：13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、：14 キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」

1. 救いの二つの面

1) 神によってすでに義なる者とされている

イエス・キリストを信じるすべての者にとって、キリストに似た者になるということは大きな目標です。パウロはこの手紙の最初の章で、神の救いわざがどのように私たちのうちに働くのかということをお話しました。そこでパウロは私たちに対して、救いというのは神のみわざであると言いました。それは私たちが自分自身のために何かしたことではなかったのです。1：6でパウロが教えることは、神の働きであるゆえに、神が働かれ始めるなら、それは必ず神が完成して下さるという確信をもつことができるということです。神を信じる決心をした者たちに対して、神はその働きを始めたゆえに、必ず、それを完成させるそのときをもたらして下さると言うのです。このことは、私たち信じる者すべてにとって素晴らしい希望を与えます。なぜなら、私たちはいつの日か必ず神の御前に立って、完成した者、成熟した者としていられることができるからです。

そして、パウロは3章で、神の働きに私たちがどのように加わることができるのか、その加わり方を教えてください。パウロは私たちが今日見ようとしているその前のところで、私たちがどのようにこの働きをして行くのかその重要性を教えてください。それは「キリストを知ること」ですが、この「知ること」というのは、単に、キリストに関する情報を得ているということではありません。パウロが「私は主を知りたい」と言ったその「知る」ということばは、個人的に非常に近い関係を表わしています。パウロが言うのは、主イエス・キリストとの関係を自分の生活の中に実際に現わして行く、そのような関係です。7節からその関係について、それがいかに重要なのかということをお話しています。彼はこれまでユダヤ教のうちにもっていた宗教的な様々な特権、様々な成果、そういうものをすべて横に置いても構わないと言うのです。キリストのためならそのような特権を横に置くことなど構わないと。キリストとの関係の上に妨げになるゆえに、彼は今までに持っていた自分の力で成し遂げてきた様々なことを横に置くことをいとわなかったのです。そして、それ以上にはるかに素晴らしいキリストを知ることの喜びについて話しています。キリストを知ることのすばらしさは、彼が今までユダヤ教のうちにあって得て来た様々な特権や地位よりはるかにすばらしいものだと言います。これまで、彼がもって来た宗教的な特権、地位、彼が築き上げてきたものに対して、彼の考えが変わったことを彼はまとめて、それらのものをすべて捨てて、それらをゴミのようなもの「ちりあくた」だと言います。これまで彼が熱心に生

きて来たこと、彼が成し遂げてきた様々な成果とキリストを知ることのすばらしさを比較したときに、それは余りにも大きな差があることであり、キリストを知ることのすばらしさが余りにも偉大であるゆえに、それらの自分が求めて来たことを捨てても構わないと言ったのです。それゆえにパウロはそのような事柄をまとめて、キリストを知ることでありキリストを得ることであると言います。パウロはこれらすべてのことを要約して9節で「キリストの義」が神によって私に与えられたのだと言います。パウロは自分自身の力で自分のために義を神の前に勝ち取ることはできないと言います。聖書が私たちに教えることは、人間が自分の力で義を得ようと一生懸命行動するそのことは、神のみ前では汚れた衣のようであると言います。神は私たちが考える義を見て、それがすばらしいとは思われません。どれほど人が良いことをしても、神の前ではそれは正しい動機によってもたらされません。けれども、私たちがキリストのうちに信仰をもつとき、神は私たちの内側に非常に不思議なことを為してくださったのです。十字架の上で神は私たちの罪を取り除いてくださって、十字架にかかっているキリストに付けられたのです。そして、キリストの持っておられた義を私たちに与えてくださったのです。それゆえに、私たちが私たちの力で得たものではない義を、私たちが得るようにしてくださったのです。けれども、そのことを神が私たちの上に為してくださるためには、私たちがキリストとの関係を持ち、私たちがキリストのうちに存在する者になっていなければならなかったのです。聖書の中では、このように私たちが自分のものではない「義」を神から与えられたという概念を見るとき、そこには常に「キリストのうちに」という概念が加わっています。このことを非常に良くまとめている箇所がⅡコリント5：21に出て来ます。これは神がいかに私たちの罪を取り除いてくださり、そして、キリストの義を私たちに与えてくださったのかを要約しているのです。**「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。」**、つまり、神が私たちを見るとき、神は私たちをキリストのうちに生きてくださって、それゆえに、私たちはキリストの義を受けた者として生きてくださるので

2) 神の義が明らかにされて行くその過程の中にある

そして、ピリピ3：10-11では、このように私たちがキリスト・イエスに対する信仰をもったゆえに辿って行くその道、行程をパウロは記しています。**「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、：11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」**。ここでも、パウロが目標としていること、彼が目指して私たちに伝えようとしている強調点は、「私がキリストを知ること」です。そして、パウロはこの10-11節の中で、先ほども話したように、知識がどういうものかその関係の深さを私たちに教えてくれます。それは単に情報を得ることではなくて、私たちが親密な関係、親密な交わりをもつことにあります。パウロはそれらのことをいくつかの表現によって表わしています。ここで言われていることは**「キリストとその復活の力を知る」**ことだと言います。また、私たちの願いは**「キリストの苦しみにあずかること」**を知ることです。そして、**「キリストの死と同じ状態になる」**ということ。そのような願望と、そのような実際の歩みが何をもたらすのか、それが**「死者の中からの復活に達する」**ということ。本当にキリストを知っているというのは、キリストが体験されたこのような事柄と私たちが深い関係を持ち、その交わりの中にあるということ。私たちがキリストに似た者となり、キリストとともにすべてを分かち、キリストとの交わりの中にあることを表わしているのです。

けれども、皆さんはあらゆる部分において、キリストに似た者ではないと言われるかもしれません。聖書は私たちにこのキリストの義がもうすでに私たちに与えられているということを教えます。それを私たちはキリストの義を得て、キリストのうちに立場として置かれていると表現します。けれども、そのような立場をもっている、パウロは私たちのうちにまだ戦いがあるということを言っています。この自分自身の戦いに対して、パウロはローマ人への手紙7章の後半部分でそのことを告白しています。パウロは私たちが得ているこの義の生涯を送らなければいけないということを言った後、7：21でパウロは私のうちにまだ悪が宿っているというその原理を見出すということです。パウロは自分がキリストに対する信仰をもっていて、キリストが望むことを行ないたいと願っているながらも、また、彼が持っている心の奥底にある動機を神が変えてくださって、それは良いことをしたいと願う者であると分かっているながら、肉のうちにあって彼の中には戦いがある、罪の方へと自分を引き寄せるものがある、それを体験していると告白するのです。その中で、パウロはこれら7章をまとめるに当たって、キリストを称えることばで終わります。なぜなら、このキリストが私たちに罪の束縛から完全に解放してくださった方だからです。そのように完全に解放されているながらも、パウロがよく分かっていることは、この地上にいる間、神が願っているキリストに似た者となって行くというその過程の道を進んでいるということです。一方でパウロは、神が与えてくださった義を信仰によって得ているということを確認していましたが、つまり、神がパウロのことを見たとき、キリストのうちに彼がいるゆえに、神は彼を義と認め、

義であると宣告してくださっています。けれども、この地上の生活において、パウロはその宣告されている義、与えられている立場上の義にふさわしいキリストに似た生涯を生きるというその過程の中に置かれているのだということです。

2. キリストに似た者になって行くその目標に到達するために

そして、この12節から、パウロは私たちがその目標に到達するためにどのようなことをして行かなければいけないのか、その助ける方法を三つ、私たちに教えてくれるのです。

1) 謙遜な不満足をもっていること

パウロが最初に言うことは、私たちが霊的にどのような位置にいるのかということに関して、常にへりくだった不満足をもっていなければいけないということです。パウロはこのことを12-13節で繰り返して言っています。パウロは12節で「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。」と言っています。そして、13節ではもっと個人的な呼びかけをもって繰り返します。「兄弟たちよ。私は、自分すでに捕えたなどと考えるはしません。」と。パウロは自分自身のことを霊的に成熟した者であり、キリストに似た完成した者であるとは考えていませんでした。パウロはまだゴールに到達していませんでした。パウロはまだ栄冠を得ていないと言います。パウロはここでもしかするとある偽教師たちが言っていたこと、「私たちは完全なのです」ということばに反論しているのかもしれませんが。そのように言っていた彼らは霊的な高慢さに包まれて、私たちは完全であるからもう罪は犯さないのだと言って歩いていました。けれども、パウロはここで個人的な呼びかけをもって、私パウロでさえもまだまだ足りないのであることを人々に訴えかけているのです。このことは落胆していたクリスチャンたちにとっての励ましのことばとなります。もしかすると、皆さんのクリスチャンとしての生涯の中であって、私はキリストのように成功を収めたクリスチャンとしての生涯を送っていないと落胆したことがあるかもしれません。皆さんは、皆さんの救い主のように生きることがないことに落ち込むことがあるかもしれません。でも、パウロがここで私たちに伝えることは、もしパウロがまだ到達していないのなら、私たちはさらにどれ程そのために一生懸命努力して生きようとしなければいけないのかということです。このへりくだりのうちに見られる不満足さは、パウロにもっともっとやっけて行こうという動機を作り出していたのです。もし私たちがパウロと同じようにこのようにへりくだった霊的不満足を自分たちのうちにもち続けるなら、私たちはもっとみことばに接し、もっとキリストのことを学んで、もっとキリストに似た者になりたいという願いを増し加えて歩んで行くことになるでしょう。

このセクションにおいてパウロはオリンピック競技者のイメージを頭に描きながら話をしています。私たちの文化においても、私たちの世界において、私たちに親しみがあるそのようなイメージをもって、私たちに励ましを与えてくれるのです。パウロは私たちに對して、永遠のすばらしい原則、原理を私たちが分かるような形で教えてくれています。パウロはここで、ランナーが競技をしている姿を私たちに思い浮かべさせようとしています。事実、今オリンピックの期間中です。日本ではどのようなオリンピック中継があるのか私には分かりませんが、私が皆さんに100mランナーや水泳選手のことを話すと皆さんはそれらを思い浮かべることができるでしょう？パウロはそのようなことを皆さんに思い浮かべさせて、霊的な真理を伝えようとしているのです。パウロはここで「捕えようとして…、ひたむきに前のものに向かって…」ということばを使ってその行為を現わそうとしています。それはゴールラインのところで、ランナーが一生懸命胸を前に反らせて、少しでも早くゴールに到達しようとしている姿を私たちに思い浮かべさせます。実は、私も高校時代に陸上競技をしていました。長いトラックを走って回っているとだんだん疲れて来て、前のめりになるのではなく後ろに傾いて行きます。その姿を見ると、ランナーがいかに疲れているのかが分かります。けれども、勝つことに焦点を定めている熱心なランナーは、そのような状況にあっても前のめりになって少しでも早く到達しようとする姿勢を保ち続けます。これがパウロがここで私たちに伝えようとしている、キリストに似た者になることへの私たちの姿勢なのです。私たちがキリストを知るために必要な様々な訓練というものを私たちが実際に自分の身に付けて、私たちがキリストに似た者となるように熱心に走り続けるようにしなければいけないとパウロは言うのです。ランナーがゴールを目指して熱心に走って行くように、私たちもキリストが待っているその線を目指して一生懸命走り続けなければいけないのです。

パウロはIコリント9:24-27でこれに似たことを語っています。「競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。:25 また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。:26 ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはしません。:27 私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」、ここでも、パウロは同じように競技者、闘技をする者のたとえを用いています。それらを用

いてパウロは競技者がいかに熱心に訓練するのかということを使うのです。パウロは私たちに対してこのような励ましをします。競技者が栄冠を目指して走るように、私たちクリスチャンも賞を受けられるように走りなさいと。そのことを私たちに明確に分からせるために、クリスチャンと競技者を二つ並べて話をしているのです。パウロは競技者は一生懸命自分を鍛え上げて勝とうとするけれど、与えられる賞は朽ちて行くものでしかないと言います。パウロが生きていた時代の競技者は、勝ったときに草の冠を与えられました。根から切り離されて編みこまれた草の冠はあつという間に朽ち果ててしまいます。今日に至っても優勝したオリンピック競技者が得るのはリボンがついたメダルです。これらのものは地上だけのことで永遠の価値は一切ありません。けれども、このような競技者は私たちの想像を絶する訓練をするでしょうとパウロは言います。彼は自分のからだに対して自制心を使い、あらゆる困難を乗り越えることができる訓練をします。そうすることによって、彼らが競技に入ったとき、最も準備の整った状態で走ることができるようにします。しかも、彼らは決して前の競技の勝敗に満足することなく、次の競技で勝つために訓練し続けるでしょう。これが前に向かって走って行くことです。

私は皆さんが野球が好きであることを知っていますが、ここにはタイガースのファンがたくさんいるように聞いています。皆さんよくお分かりのように、応援しているチームが去年優勝したからそれでよしとするわけではないですね？1シーズン中、皆さんが応援している選手たちが健康でい続けることを願います。そして、毎試合ごとに準備を整えて試合に勝つためにやって来ることを願います。彼らが最善を尽くしてジャイアンツを打ち負かすことができるように。ですから、選手たちは訓練を止めることはできません。前打席ですばらしいヒットを打ってそれで満足して次の打席では何もしないで臨むわけにはいかないのです。次のチャレンジに打ち勝つための準備を常に整えていなければなりません。それがパウロが自分のクリスチャンの生涯に適用したへりくだった不満足さなのです。パウロは自分が霊的な成熟を手に入れていないゆえに、熱心に霊的訓練を自分に課したのです。そうすることによって、彼が次の戦いにいつでも立ち向かうことができる準備を整えたのです。彼は常によりキリストに似た者になりたい、より良くキリストを知りたいという願望に駆り立てられていたのです。

2. 一つの焦点をもっていること

二番目に、どのようにキリストを知りこの目標へと向かって行くのかということについてパウロが教えることは、私たちが一つの焦点を持っているということです。もし、私たちがキリストに似た者として、キリストの義を私たち自身がしっかりとって生きて行こうと願って、そのことを目指して行こうとするなら、私たちは必ず、間違いなく一つの焦点、一つのことを励んでいなければいけません。このことをパウロは13節でこのように言います。「**ただ、この一事に励んでいます。**」と。キリストを信じているあらゆる者たちは、必ず、どこかで私たちを妨害するものにぶつかります。私たちの目を目標から逸らそうとする様々な妨害です。けれども、私たちは「私はキリストに似た者になる」という何よりも優先した一つの焦点を持ち続けなければいけないのです。もしかすると、この中には学生の方がおられて、その方は自分の勉学に焦点を当てようとしているかもしれません。また、仕事をしている方は朝から晩まで長い時間をかけて、この職場にあつて最もすばらしい人物になるのだと、そのことに焦点を当てている方がおられるかもしれません。けれども、みことばが私たちに教えることは、「**だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。**」(マタイ6:33)です。もし、皆さんがこの地上での様々な事柄を第一として、そこに焦点を当てるなら、皆さんが本来目指さなければいけない「キリストに似た者になる」という霊的な正しい方向に向かうことはありません。もし、皆さんが「キリストに似た者になる」ことを何よりも大切な一番の優先事項とするなら、他の事柄は優先事項とはなりません、それらが加えられることがあるとみことばは言います。パウロは他の箇所でも、私たちが他のところに連れて行かれてはいけないと言います。そして、彼は私たちに対して、キリストに対する献身が何よりも大きなものでなければいけないと言います。

私たちはオリンピックの競技者にそのことを見出すことができます。今回のオリンピックに参加している選手の一人で、これまで競技をして来た者たちの中のだれよりも多くの金メダルを獲得した人物がいます。競泳の選手でマイケル・フェルプスと言います。ある雑誌の記事にこのような疑問がありました。いったい、どのようにして彼は長い期間これだけの金メダルを取ることができるような訓練をすることができたのか？と。彼が答えたことは、彼の一日の訓練のスケジュールは自分に三つのことしかさせない、それは一つは食べること、もう一つは寝ること、そして、泳ぐことだと言います。これがまさに私たちが持たなければいけない決意の例になるのです。このオリンピックの中で彼は八つの金メダルを取ろうとしました。それをするためには、彼の全生涯は「泳ぐ」というその一点に向けられていなければならないのでした。もうすでに、私たちが考えたように、オリンピック競技者が朽ちてしまう金メダルを得るためにそれだけの集中力をもって、決意をもって人生を生きて行こうとするなら、私たちが神の前に得ることができる栄冠のために私たちはどれ程、もっと焦点を当てて、神のために生きよう

としなければいけないことでしょう。私たちは人生を生きて行く中で、もっといろいろなことを吟味しなければいけないのです。私がしているこのことは、私がキリストに似た者となるためにどれ位役に立つのだろうと。私たちは他の事柄、まったく価値のないものへと私たちを導いてしまうような事柄から離れるように、自分を守る習慣をもたなければいけないのです。

高校時代に私は陸上競技をしていて私はランナーでした。私は最初に走ったレースで最下位だったのです。それだけでなく、いっしょに走った女性の選手にも追い抜かれてしまったのです。高校生の陸上競技者として、女性にまで抜かれてしまって最後にゴールしたことは非常に恥ずかしいことであり、私にとって傷つくことでした。そのとき、ゴールに入る前に私は頭の中でこれは止めるべきではないかと考えました。同時に、私は何かいい言い訳を捜さなければとも考えました。足を引きずらなければいけないかな…、そうすればいい言い訳になるからと。クリスチャンの生涯にあっても私たちは同じようなことをする可能性があります。私たちが願っている通りに物事がうまく行かないとき、私たちはもしかするともうクリスチャンであることを止めた方がいいのではないかと思うかもしれません。私たちが神の前に不誠実であったときに、神に対して何か言い訳を作らなければいけないと思うかもしれません。けれども、私は高校時代、陸上競技をしていたときにある一つの決心をしたのです。私は練習を決して休まないとし、コーチが練習をすると言うといつでもそこへ行きました。そして、練習が始まる前に私はそこに行って完全に準備が整っているようにしました。そして、練習後にはコーチに聞くようにしました。何か他にやることはありませんか？どうすればもっと早く走れるようになりますか？と。他の部員たちが帰っても私は一人残って練習を続けました。また、私は自分の食生活を変えました。健康的な食事を取るようにし、もっとエネルギーがあるように整え、そうすることによってやせました。また、自分の時間を用いて、レースをするに当たってどのような計画をもつべきか、そのような勉強もしました。そのシーズンの終わりに私はレースに勝つようになりました。

同じことが、クリスチャンの生涯にも言えます。もし、私たちがよりキリストに似た者になりたいとするなら、私たちはもっとみことばを掘り起こして学ばなければなりません。自分が参加できるあらゆる聖書研究会に参加しなければいけません。そして、そこで学んだ事柄を自分の生涯にしっかり適用してそれを行なって生きることを決意しなければいけません。それを皆さんがやって行くとき、皆さんは個人的なデポーションの中で、キリストと結んで行く関係をより深いより良いものへと変えて行くことができるのです。ちょうど、競技者が練習の前にすべて準備を整えて練習に参加することができるように、皆さんが礼拝に来るに当たって聖書を開き、心を開き、祈りのうちにこの場に来ることができるのです。それがパウロがここで言っている「**この一事に励んで**」キリストに似た者となるという焦点をもって生きて行くということなのです。パウロが言うように、神は私たちがキリストに似た者となるという一つの焦点をもった人生を生きるように求めておられます。ですから、私たちがキリストに似た者になるという目標に向かって歩んで行くに当たって、私たちはへりくだった不満足をもっていなければいけないし、一つの事柄に焦点を当てていなければいけないのです。そして、最後にパウロが私たちに教えることは、

3. ありとあらゆる邪魔となるものを取り除く

そのことをパウロは13節でこのような表現をもって言っています。「**うしろのものを忘れ、**」と。私たちが人間としてもっている様々な問題の一つは、私たちがこれまでに行なって来た様々な過去の事柄に囚われてしまうということです。過去の成功に囚われてしまって人生をうまく生きて行くことができないことがあります。同時に、過去の失敗においても同じことが起こります。高校時代、私のコーチがいつも私に言ってくれたことは、毎レースごとにあなたは必ずレースにやっ来て来なければいけないということです。私たちが他の選手がどのような走り方をするのかということに思いを留めてはいけないと言います。以前、その選手に負けたことがあるかもしれません。けれども、あなたはその選手が今週病気だったかどうかとも分からないでしょう。そうなら、あなたがした準備は他の選手よりも早く走ることができるように整えてくれたかもしれないでしょう。だから、頭の中に残っているそのあなたの力を発揮させないようにする邪魔となるものを取り除かなければいけないのです。そのことを、霊的なことに戻すなら、私たちは以前誘惑に打ち勝つことができなかつたからという、その過去の失敗を持ち出すことはできないのです。また、これは大丈夫、前にこれに打ち勝つことができたからもうそれに負けることはないというリラックスすることもできないのです。もしかすると、皆さんはあるとき神との間にすばらしい時間をもってみことばが言っていることを明確に理解したかもしれません。けれども、過去においてそのようなことがあったという事実は、もしかすると、今皆さんにとって妨害となるかもしれないのです。なぜなら、前にこのようなすばらしいことがあったから大丈夫と思うかもしれないからです。パウロが皆さんに求めていることは、皆さんのキリストとの関係を今、そして、前に向かって持っていなければいけないということです。

また、競技者の例を見ることができます。競技者が最終コーナーを回って、そして、直線に入ったとき彼が目に見るのはゴールラインです。彼はそのゴールラインに目を向けなければいけないのです。パウロが霊的に話をするとき、ここで言うことは神が召してくださる「上への召し」です。私たちはこのときに目を向けていなければなりません。イエス・キリストと顔と顔を合わせて会うことができるその瞬間に目を向けていなければいけないのです。ランナーは周りを見回しながら、だれが私のことを見ているのだらうと思いつながら走ることはできません。同様に、霊的なことにおいても、私たちは神の方にしっかり目を向けて、周りの人たちのことに目を向けながら、いったい今日はだれが見ているのだらう、私は彼の前で彼女の前でキリストに似た者として生きようかなと考えることはできないのです。また、キリストに似た者になるというその目標において、私たちはうしろを振り返って、他の人たちと自分を比較して私はあの人よりもどうだらう、この人よりもどうだらうと考えながら生きることができないのです。多くのときに、私たちがランナーとして走っているとき、目の前に選手がいて私もその後ろにいてゴールを目指して走っているわけですが、先頭にいる選手が後ろに迫って来る私がどれ程近くになっているのかということに気を遣って、後ろを振り返ってしまうことがあります。そのような競技の中で私が学んだことは、先頭にいる選手が左側から首を向けて振り返ったときに、私はスーと右側から抜いて行くことができるということです。そうすると、彼は抜かれたことすら気付かないのです。そして、彼が目の前に向け直してゴールラインを見ようとした瞬間、彼は私の背中を見るのです。

この義なるイエス・キリストに似た者となるというそのすばらしい栄冠を目指して私たちが走るとき、私たちは後ろを振り返って他の人はどうだらう、他の人と比べてどうだらうなどと考えながら生きて行くことはできないのです。このように、神に向かって邪魔となるあらゆるものを取り除いて、神の前に熱心に向かって行くそのことを、私は一つのことばに要約することができるのです。それは、キリストの前に立ったときにキリストが「よくやった、良いしもべだ」と言ってくれるそのすばらしいことばです。私にとって何よりの栄冠は、私がキリストの目の前で「あなたはわたしに忠実だった」と神が言うてくださることです。私がそこに立ったときに、間違いなく、他の人たちが私に関して何を言っているのかを気にすることはありません。私の目はキリストという目標に常に向けられているのです。これらの事柄に私たちが注意を払ってしっかり生きて行くなら、私たちにもうすでに与えられている立場としての義というものを、実際に私たちの生活の中ではっきり現わしながら生きて行くことができるのです。

皆さんといっしょにみことばを開いて見ることができたこと、私の特権として感謝しています。